



TITLE:

山羊座の恒星群が黄道光に及ぼす影響 (黄道光の研究號)

AUTHOR(S):

浅野, 英之助

CITATION:

浅野, 英之助. 山羊座の恒星群が黄道光に及ぼす影響 (黄道光の研究號). 天界 1933, 13(149): 330-332

ISSUE DATE:

1933-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162405>

RIGHT:

山羊座の恒星群が黄道光に及ぼす影響

黄道光課幹事（山口縣） 浅野英之助

[I]

輝ける一つの恒星の周囲が、他の星無き夜空に比して微かに明るいといふことは一般に見られるところでありまして、その原因は大氣の清澄度に關する散光と、心理學的幻視とによるものと思はれます。此の現象は光度弱きものにありましては、殆んど感ぜられないか、或は全く認められないものではありますが、殊に五六等程度の微光星は、星そのものがすでに見難いものですから、全然問題とはなりません。

然しながら、かくの如き肉眼的微光星でも、數個或は十數個かなりに接近して相連るか、或は密集して一群をなす場合には、それ等の星々を含む一區劃が他の星なき部分に比して淡く明るく見えるといふことは、觀測者の屢々經驗するところであります。これは心理學的原因によるものと思はれます。黄道光及び對日照觀測上重大なる影響を及ぼすものは、黄道附近に散在する星々のうちで、一連或是一群をなすところの此等の光度小なる星々の集りであらうと考へられます。尙、黄道附近にある7個の一等星や、特に光度大なる遊星等の影響は、黄道光の明るさと外形を不明瞭ならしめることはあつても、黄道光の如き面積大なる薄光に對しては、殆んど考慮するには及ばないものと思ひます。

小山理學士の紹介によれば、對日照觀測で有名な Searle は黄道光と無關係な永久的光帶として、

鷲、水瓶、魚、鯨、羊、プレヤデス

蟹、獅子、六分儀、髮

なる重なる二筋を認めてゐるといふことでありますが、黄道光及び對日照の研究に於ては、此等の事柄は重大なる問題であらねばなりません。

[II]

茲に述べますところのものは、觀測中に、又は最初よりかくあらんと豫想

して調査したものではなく、黄道光の頂點の位置の統計的調査のため、1930—1931に至る2ヶ年間24人の課員によつて得られたる455個の貴重なる黄道光観測結果を検討中、偶然にも明瞭に指摘されたものであります。

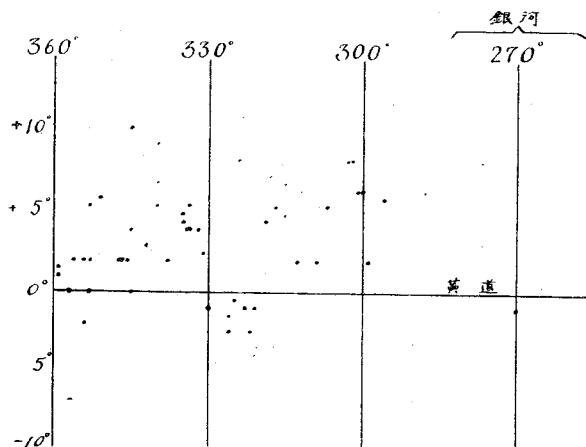
初め各観測量を適當に整理し、頂點の黄道よりの偏りを、年度の別なく、 0° — 360° の黄經の順に記入し、全黄經に亘り黄道光の観測されたる頂點の位置を示す點ダイアグラムが出来上ります。此のダイアグラムは非常に興味深い種々なる事象を示してをりますが、今ここには必要な一部分として黄經 270° — 360° を見ますと、圖中 319° — 330° の黄道以南にある各點は、明らかに一群をなして前後と漸進的連絡なく、明瞭に飛び離れて存在してゐることが看取されます。

此等の點は9個よりなり、此の特異な偏りの原因を検討してみますに、恰もその位置に、山羊座の恒星群が見出されたのであります。山羊座の恒星群とは $\delta \gamma \varepsilon \zeta \eta \theta$ 等によつてとり巻かれたる一團を云ふのでありまして、その内容は大體、

3 等 星	1 個
4 等 星	5 個
5 等 星	8 個
6 等 星	9 個（ノルトン星圖より）

以上肉眼星約23個より成つてをります。此等のかなりに密集して一團をなす恒星群が與へるところの幻視的薄光によつて、黄道光にある誘惑を及ぼすであらうと考へることは最も自然なことではありますまいか、故に私は此等9個の観測は明らかに此恒星群を含む幻視的薄光を黄道光の頭部として、誤認されたるものと推定したのであります。

ダイアグラムの他の部分に於ては、斯くの如き特異な偏りを指摘し得るものはありません。が然し、僅かな恒星の密集(双子座 $\alpha \beta$ の如き)或は永久的光帯の如きものに、影響を蒙つてゐる如く考へられるものが多少とも見受けられるのでありまして、果して、どれ程が偽りの黄道光で、どれ程が眞正の黄道光であるかは、今後一層多くの観測結果と慎重なる研究にまたなければなりません。



参考としました文献は花山ブレテン第179, 190, 208, 212, 227, 252の諸号であります。

今年初以来の彗星界

去る七月25日 米國リク天文臺の Jeffers 氏は第一ヲルフ彗星の歸來を赤經 $20^h 07^m 57^s$ 赤緯 $+20^\circ 40'$ (春分點 1933.0) 即ち矢座に發見した。光度は18級!! 之れは今年度の e 彗星である。

ちなみに、今年初からの彗星は下表の通り (本誌前號参照)

符號	彗星	發見者	發見日	近日迄通過
1933 a	新	L. C. Peltier (米)	2月16日	2月6日
1933 b	Winnecke	A. Wachmann (獨)	3月24日	5月18日
1933 c	Giacobini	R. Schorr (獨)	4月23日	7月16日
1933 d	新	Carrasco (西)	7月15日	?
1933 e	Wolf	Jeffers (米)	7月25日	來2月末日

但し、カラスコ彗星は、發見電報があつたきり、世界中で誰も未だ之れを確認してゐないらしい。

此の外、Finlay 彗星が歸來する筈であるが、未だ誰も見附け出さない。